

宋学の尊王攘夷思想とその日本への影響

小島 毅

(二〇一五年七月四日人文学会第一一回大会)

『詩』の小雅六月篇とそれに続く采芑篇は、周の宣王の北伐と南征とをそれぞれ詠ったものとされる。この両詩以下は小雅のなかでも夔小雅と呼ばれた。その理由は六月篇の序によると、「小雅がすべて廢れ、四夷がかわるがわる侵略してきて中国は衰えた（小雅尽廢、則四夷交侵、中国微矣）」からである。宣王は先代の厲王が悪政を布いて追放され所謂「共和」の時期を経て即位し、周の権威復興に務めた。その象徴的事績として、北方の戎狄と南方の蛮夷とを征伐し、王の威信を示した。これを讃えたのが『詩』の二篇なのである。朱熹も『詩集伝』で、「先王が戎狄を治めるやりかたはこのようなであった（先王治戎狄之法如此）」と評する。夷狄を伐ち攘い中国の民を護ることは、天命を受けた王が果たすべき役割であった。

宣王の後を継いだ幽王は都を申国と犬戎の軍に攻められて殺されたため、子の平王が洛陽に東遷して所謂春秋時代が始

まる (BC. 770)。ただし、孔子が筆削して成書したとされる『春秋』は、平王治世の終盤にあたる年、魯国の隠公元年から始まる (BC. 722)。

春秋時代は周王の権威がますます衰え、周囲の夷狄が中華を侵してゆく過程であった。南方の強国として、はじめは楚が、やがて呉や越が力を蓄え、中原に進出して来る。かくして、王に代わって夷狄を攘う役割を担う諸侯が現れる。それが覇 (「伯」とも) であった。

『論語』憲問篇第十六章は、孔子が斉の桓公と晋の文公を比較し、前者のほうが人格的に優れていたと評している。朱熹の『論語集注』は「二公はいずれも諸侯の盟主として、夷狄を攘って周の王室を尊んだ者である (二公皆諸侯盟主、攘夷狄以尊周室者也)」とする。また、同じ篇の第十八章、管仲を仁者と評した章では、「周の王室を尊び、夷狄を攘ったのは、どちらも天下を正しくするためであった (尊周室攘夷狄、皆所以正天下也)」と述べ、管仲が桓公を善導して尊王と攘夷を実現したことを讃えている。(厳密には、孔子がそのように讃えた文言であると、朱熹は解釈している。)⁽¹⁾

こうした思想・見解は、もちろん宋代以前からあった。そもそも春秋学は、孔子が周王の威信が衰えて中国の礼秩序が崩れつつあることを嘆き、過去の人物たちに筆誅を加えるために、魯の年代記二百四十二年間の記録を添削したのが『春秋』であるという伝承を大前提に成立していた。たとえば、楚や呉の君主は実際に王を僭称していたのだが、経文では「子」という低い爵位で呼ぶことによって華夷の間の名分秩序を守り、周王が与えた封爵を尊重することの重要性を示したと解釈するたぐいである。経文が明確にそう述べているわけではないのだけれども、孔子の意図は華夷の区別にあるとして、実力ある諸侯 (覇) が周王に代わってそれを実現する行為を是認した。

宋学においてもこの考え方が継承される。趙汴の『春秋属辞』卷一二に言う。「覇者とは、諸侯をまとめ、夷狄を攘い、王室を尊ぶことを、その定義とする (夫伯者、以合諸侯、攘夷狄、尊王室、為名義者也)」。この定義によるならば、当然、

夷狄は覇者たりえない。「春秋」で楚の君主を（王号ではなく）爵位で（「子」とだけ）呼ぶのは、一貫して夷狄の強者であると記録しているのである。ところが、後世の学者は、なんと五覇（に楚を数える）という説によって『春秋』の主旨を乱している。けしからんことである（春秋於楚君書爵、終始志夷狄之彊而已。後世學者、乃以五伯之說、乱春秋之旨、可乎³）。楚は元來夷狄であった。しかも勝手に王を名乗っている。その国を覇者に数えることは語義矛盾であり、孔子の意図に反するというのだ。

趙汭は元末の人で、その意味では「夷狄」が中国を支配するなかで生きていた。ただ、元代においては、のちに清朝がおこなったような禁書や文字の獄のような強圧的な言論統制は見られない。この時代に、攘夷を掲げる朱子学がむしろ体制教学として確立していく。以下、そこに至る経緯を宋初に立ち戻って時間に沿って概観していこう。

宋学における尊王攘夷思想のさきがけとされるのが、孫復『春秋尊王發微』⁴である。孫復は、おそらく公羊学の三世説を意識して、中国と夷狄との関係から春秋時代を三つに区分する⁵。すなわち、僖公四年の、齊桓公が中国の諸侯を率いて楚と戦い、召陵で会盟するに至った事件について、「はじめて夷狄を攘い中国を救う功業が達成された（攘夷狄救中国之功、始著也）」と評する。楚が南方の強大な勢力として登場し、威信をすでに喪失していた周王に代わって齊公（春秋経文の爵位表記では齊侯）が覇者として尊王攘夷を担うようになるのが、この時だったという認識である。

それから百年余、魯襄公は楚に随従して伺候するようになっていた。孫復は経文の「如（ゆく）」を事実上は「朝」であると解釈する⁶。

公が楚に朝貢したのは、齊桓公や晋文公はすでに世を去り、夷狄が日々に盛んとなり中国が日々に衰微したため、公は強大な夷狄のところへ遠路出向いて朝貢するにいたったのである。

公朝楚者、桓文既死、夷狄日熾、中国日微、故公遠朝強夷也

(襄公二十八年「十有一月公如楚」条)

楚に伺候した襄公はそのまましばらく楚に滞在する。ちょうど十二月に楚康王が没しているから、その葬儀参列まで帰国を見合わせたものと推量できる。⁽⁷⁾ そのため、襄公は楚で年を越した。そのことを、経文は「二十有九年春王正月、公在楚、夏五月公至自楚」と記す。この件はすでに公羊学で襄公が夷狄に長逗留したことを特記したものと解していた。孫復は十一月から五月まで襄公の楚滞在が七ヶ月に及んだとわざわざその期間を述べたうえで、夷狄にあることは他の中国諸侯のところに長期滞在するよりも悪いことだとする。

襄公の時に、楚の強盛さに庄せられて魯はこれに屈服した。夷狄が中国を本格的に侵掠する時期にはいったのである。昭公四年の申の会について、襄公二十八年の上掲条と同じく覇者不在の状況を指摘して、「これ以降、天下・中国の政事はすべて夷狄が交代で取り仕切るようになった(自是天下之政、中国之事、皆夷狄迭制之)」と述べる。「迭制」とは、その後、楚に代わって哀公の時に台頭してきた呉や越のを含めてるのである。孫復は哀公十年に魯が呉に従って斉を伐ったことや、哀公十三年の黄池の会(呉が覇者として振る舞った会盟)の箇所でも、同様の議論を繰り返している。楚の存在を意識して、中国と夷狄との関係から春秋二百四十二年間を回顧し、尊王の実践が衰えゆく過程を描こうとしたのが、孔子の筆削の意図だった。そう孫復は解釈し、そこに春秋の大義を見る。そのため、中国諸侯の行為もこれに反する場合は夷狄とみなされる。というか、孔子がそのように扱ったと考える。たとえば、成公三年の「鄭伐許」条では、公羊伝の解釈を踏襲して鄭を夷狄として扱った文言だとし、それは鄭襄公が「中華にそむいて夷狄につき(背華即夷)」、楚におもねって同年中に二度も許を伐ったからだとする。

孫復は慶曆三先生の一人として胡瑗・石介と並び称される。『宋元学案』では胡瑗とその門弟たちを扱う「安定学案」に続く、巻二「泰山学案」の中心人物である。全祖望が作成した子弟関係の系図によれば、石介を筆頭に文彦博（司馬光と並ぶ旧法党の大物）・劉牧（河図洛書の易学で著名）・范純仁（范仲淹の子）・呂希哲（呂夷簡の孫、呂公著の子）らが孫復の門弟だったとされる。その末席に朱長文という人物がいる。

『宋史』巻四四四「文苑六」に載る伝によると、朱長文は二十歳未滿（未冠）で進士になったものの足をいたために出仕できなくなったために故郷蘇州で著述にいそしみ、「六経すべてについて自説を述べた文章がある（六経皆有辨説）。巻二〇二「藝文一」には彼の著作として『春秋通志』二十巻が挙げられている。ただ、『宋史』は孫復との師弟関係に触れていない。

『宋元学案』巻二の本文では朱長文について「孫復から春秋学を学び、『春秋尊王發微』の奥義を窮めて、『通志』二十巻を著した（從泰山学春秋、得發微深旨、作通志二十卷）」という。朱彝尊『經義考』巻一八一はこの書を取り上げて「佚」としており、ということは黄百家・全祖望が『宋元学案』の補綴をしていたころには本文は失われていたらしい。ただ、朱彝尊はその自序を引用掲載している。その日付は紹聖元年正月、すなわち一〇九四年。元祐年間の旧法党政権期が終わって哲宗の親政が始まり、新法党が政権復帰した年である。この自序では、王安石政権下で春秋が経学からはずされたことに朱長文が批判的で、師の孫復を受け継ぎ蘇州で地道に研鑽を積んでいたこと、元祐年間に開封に呼び出されて久しく絶学状態にあった春秋の復興に努めたことが記載されている。朱彝尊は続けて朱長文の従子の朱佺がこの書を朝廷に進呈した際の表を掲載している。（付記された王心麟『玉海』からの引用によると淳熙十四年、すなわち一一八七年のこと。）そこでは春秋の趣旨を「中国を尊んで夷狄を賤しむだけではなく、天子を尊んで諸侯を抑えようともしていた（非独貴中国而賤夷狄、又将尊天子而抑諸侯）」と述べる。あるいは『春秋通志』本文にあった表現かもしれない。これが

孫復の主張でもあったことはすでに述べた。

そして、『宋元学案』卷二では朱長文の門弟としてただひとり胡安国を挙げている。卷三四の「武夷学案」冒頭の系譜表の胡安国の箇所には、広く知られた「二程私淑」に先立って朱長文の門人であることが記載され、またそれによって当然そうなるわけだが「泰山再伝」（泰山は孫復の号）とも記されている。伝の本文では朱長文との関係に言及しないが、この関係は子の胡寅が書いた「先公行状」に述べられており、確かであろう。胡安国といえは春秋胡伝と俗称される注解によって知られており、この書が明代に公定解釈とされたことから、宋代における春秋注解の代表作とみなされるに至った。

胡伝は、たとえば桓公五年「鄭伯逃帰不盟」の条で、「春秋は名分をいい周王を尊んで、大義を主旨とする（春秋道名分尊天王、而以大義為主）」と言うように大義名分論をその特徴とする。もっとも、すでに知られているとおり、大義名分という四字熟語は和製である。胡伝は関連する事件があるたびに「尊中国攘夷狄」の理想（僖公二十三年）と「外為夷狄所制」という現実（襄公二十九年「公在楚」条）が説かれ、尊王攘夷が宣揚される。

呂大圭という、陳淳の孫弟子にあたる人物がいる。つまり、朱熹の三伝ということになる。『宋元学案』卷六八「北溪学案」に載る伝によると、彼は泉州の人で、蒲寿庚が蒙古に降ったの⁽⁸⁾に逆らって殺されたという。その『春秋或問』は哀公十三年の黄池の会について、次のように述べている。

楚は夷であるが、呉はもっと夷である。夷であればあるほど中国にとって害をなす度合いも大きくなった。（中略）
聖人孔子が魯に抱いた希望は、ここに至って絶えてしまった。そのために『春秋』はここで終わっている。この見解は先儒の言い及ばないところであるので、ここで明らかにしておき、後世の判断に委ねる。

楚夷也、呉愈夷也。愈夷而愈为中国患。（中略）聖人望魯之意、至是絶矣。是故春秋於是終焉。斯義也、先儒偶未之

及、故發明之以俟知者。

従来、春秋学では孔子が擱筆したのは哀公十四年の獲麟であるとされてきた。公羊伝と穀梁伝の経文はそこで終わっている。ところが、呂大圭は、むしろその前年の黄池の会こそが、孔子が春秋の記述を終える理由だったと説いている。それは要するに、孔子が春秋筆削を思い立った理由ということでもある。聖人孔子は、魯をはじめとする中国諸侯による尊王・攘夷の実現を断念し、史書のなかに微言大義を籠めることで後世に期待したというわけだ。獲麟という瑞獸出現を重視してきた旧来の天人相関思想と距離を置き、むしろ夷狄の跋扈にこそ孔子の嘆きを見ようとする点で、宋学の精神を象徴する解釈といえよう。この見解は彼自身の時事的所感によっていたのかもしれない。すなわち、「楚夷也、呉愈夷也」の楚を女真（金）、呉を蒙古（元）と置き換えて読むということである。先述のとおり、こののち彼は宋が元に飲み込まれることに抵抗し、夷狄出身であった蒲寿庚に殺される悲劇に見舞われる。

呂大圭と同じく、元に投降するのを潔しとせず死を選んだ人物として、文天祥がいる。彼は状元（科挙主席合格者）として官界のエリートだったが、権臣賈似道に楯突いて地方に出されていた。臨安（杭州）に危機が迫ると呼び戻されて宰相となり、元との交渉にあたる。宋政府は無血開城・無条件降伏の道を選んだが、彼自身はレジスタンス運動に身を投じ、捕えられて大都（北京）に護送される。元世宗（クビライ）から臣従するように説得されたが応ぜず、刑死した。

彼の「正気歌」は朱子学の世界観にもとづいて、天地の正気が艱難時の英雄たちの行為として現れることを、いくつもの事例を列記して述べ、三綱・道義の前には生死は論ずるに足りないとして、自分が宋への忠節を貫いて死ぬ覚悟を詠った詩である。尊王攘夷という文言が登場するわけではないのだが、後世、宋の皇帝への忠節を尊王、元に屈服しなかったことを攘夷として解釈されるようになる。⁹⁾

日本の江戸時代、この「正気歌」は広く読まれ、また同名の模倣作がいくつも作られた。それは西洋諸国の脅威を感じた人たちが救国を志し、みずからを文天祥の身に重ねて陶醉したからであった。そうした「正気歌」のうち、水戸学者藤田東湖のものには「英霊」という語が使われ、靖国神社遊就館において靖国祭神への呼称の語源と認定されている⁽¹⁰⁾。

水戸藩主徳川斉昭は東湖を側近として重用し、ペリー来航後の尊王攘夷論で指導的役割を果たしたことで知られる。名目上は彼の名による「弘道館記」には、徳川家康の功績を讃える文脈で撥乱反正と並んで尊王攘夷を挙げる。水戸の弘道館には今も彼が揮毫した「尊攘」の二文字が掲げられている。「弘道館記」は実際には東湖が書いた文章で、さらに東湖が君命を奉じてその解説文として執筆した「弘道館記述義」では、「尊王攘夷」という一句に付けた注解として、織田信長・豊臣秀吉の尊王の実践を承けて徳川家康が天皇の臣下として振る舞ったさまが紹介される。つづけて、家康によるキリスト教禁圧政策を高く評価する。そして、日本の「王」はあくまでも天皇であるとし、徳川将軍に「日本国王」を自称させた事例（新井白石の朝鮮通信使への対応）を罵倒する。水戸学では徳川将軍家は尊王を実践すべき覇者として捉えられた。「征夷大將軍」という職名が、幕府は攘夷する責任があるという彼らの見解を正当化する。したがって、攘夷をせずに夷狄に屈して開国することは覇者としての資格を放棄するものだということに、論理的にはなる。尊攘派が幕府の開国政策を批判するのも、うべなるかなである。

藤田東湖に心酔していた吉田松陰にも「正気歌」がある。松陰は幼少時から父の薫陶を受けて尊攘思想に染まり、最後に江戸に送られる際の父への別離詩にも「少少尊攘志早決」と感謝する句が見える⁽¹¹⁾。最近復刊された玖村久雄の『吉田松陰』では、「父の教育」と題する一節で以下のように述べる。

四書五經の素読、頼山陽の楠公墓下の詩や詠史類、菅茶山の詩などはこうして父の口から兄弟の耳に入り直ちに口に

出で、そうしてまた心臓にかえって行ったのである。特に注意すべきは父の尊皇精神の教育である。(中略)後にも述べるように松陰の国体的自覚は年齢と共に変化し深まって行ったが、而もその根底に力強く張って居た思想の根はこの少年時代に受けた父の尊皇的精神の教育である。⁽¹²⁾

「楠公」は楠木正成、南朝後醍醐天皇の忠臣である。彼に対する顕彰運動は『太平記』を読む行為のなかで開始され、⁽¹³⁾徳川光圀が墓石建立と「嗚呼、忠臣楠子之墓」という揮毫をしたことで尊王思想を象徴・体現する人物として偶像化され、この見解が頼山陽らによって幕末には一般化していた。⁽¹⁴⁾その正成イメージは、朱子学的な倫理・論理で潤色された「楠公」であり「楠子」であった。

この玖村の評伝はその刊行時期の社会状況を反映して、尊王思想を過剰に高く評価しているところがあるかもしれない。しかし、松陰が本質的には尊王攘夷論者であったこと、その思想形成が父や叔父による朱子学的知識の庭訓によるものであったことは、史実としてゆるがせにできないものである。彼らにとって、日本独自の国体、すなわち『日本書紀』にある天壤無窮の神勅にもとづくことされる万世一系の天皇による統治は、何を措いても護持されるべき対象であった。『日本書紀』の創作自体がその思想資源を中国に借りたものであったし、とりわけ天壤無窮の神勅を特記・強調するのが江戸時代になって顕著化する現象であることは、これもまた朱子学受容の影響とみなすことができよう。

「四夷交侵、中国微矣」(『詩』六月篇の序)となる懼れが生じるなか、王たる天皇の権威・権力の恢復が図られる。「征夷大將軍」を職名とする覇者がその職務を果たしていないと尊王攘夷論者たちは判断し、代わって天皇の直接の威光によって国難を乗り切ろうとする。末学者たちが遼や金の脅威を実感しつつ説いていた政治理念は、時間的・空間的な変容を経て日本の歴史にも大きな影響を及ぼしたのである。

〔註〕

- (1) 土田健次郎『論語集注4』（平凡社東洋文庫八五八、二〇一五年）の四六―五八頁を参照。
- (2) ここ、趙汭は「疆」字を書いたのかもしれない。その場合は、楚はあくまでも夷狄の疆域にあって中華ではないと論じていたことになろう。
- (3) 楚の莊王は、『史記』・『荀子』等で五霸を列記する場合に加わっている。『漢書』諸侯王表は彼を外しているもの、代わりに呉王夫差を数えている。
- (4) 諸橋轍次『儒学の目的と宋儒の活動』（初版は大修館書店から一九二九年に刊行。一九七五年に同社から刊行された著作集第一巻に所収）でかなり詳細な紹介がなされている。佐藤仁『宋代の春秋学―宋代士大夫の思考世界』（研文出版、二〇〇七年）は第一章で孫復を取り上げている。
- (5) 公羊学では十二公を隠・桓・莊・閔・僖・文・宣・成・襄・昭・定・哀に三区分する。
- (6) 「朝」は君主が臣従する相手の居所に伺候することで、『春秋』では附庸の諸侯が魯に「朝」する事例が数多く、この同じ襄公二十八年にも夏に「邾子來朝」とある。
- (7) 同じくこの年十二月には周靈王が崩御しているのだが、当然、魯襄公はその葬儀には参列していない。『春秋』の日付によれば、周靈王の崩御が甲寅、楚康王の死去が乙未でその四十一日後ということになるから、この月には閏月があったと解釈される。
- (8) 蒲寿庚は西アジア系ムスリム海商出身だったとされる人物で、宋から泉州の提挙市舶司に任じられ、水軍を掌握していた。彼が元軍に投降したことで元は国際交易港泉州を無傷で入手できた。桑原隲蔵『蒲寿庚の事蹟』（平凡社東洋文庫五〇九、一九八九年。原題は『宋末の提挙市舶西域人蒲寿庚の事蹟』で、東亜攻究会より一九二三年に刊行された）を参照されたい。
- (9) おそらく、中国で明代に蒙古批判のなかでこうした解釈が成立していたと思われるのだが、この経緯については具体的な事情を解明できていない。
- (10) 詳細は拙著『増補 靖国史観』（ちくま学芸文庫、二〇一四年）を参照していただきたい。
- (11) 『吉田松陰全集』第七巻の五一―六頁に載る。
- (12) 玖村敏雄『吉田松陰』（文春学芸ライブラリー、二〇一四年）の二七―二九頁。なお、この評伝の初出は一九三六年である。

(13) 『太平記』がその後の政治思想に対して持った意味について、若尾政希『「太平記読み」の時代——近世政治思想史の構想』(平凡社、一九九九年)、兵藤裕己『太平記〈よみ〉の可能性——歴史という物語』(講談社学術文庫、二〇〇五年。初出は一九九六年)などがある。

(14) 頼山陽の『日本外史』は『春秋左氏伝』の内容・文体を模している。江戸時代の春秋学については今後慎重に検討していきたいが、左伝が文章の規範として盛行していたこと、科挙との連動性がないため胡伝など宋学系の書物があまり学ばれなかったことが想像される。